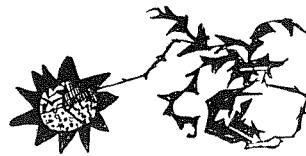


## 太田圓三氏を懷ふ

一 記 者



歐米人は自殺する事を卑怯な仕業だと言ふ  
或は自殺の動機が事業に失敗した人に多いから宗教的に斯く言ふのかも知れない。

翻つて我々日本人は自殺する事は勇敢な行為だと思つてをつた、最も之は古來日本の武士道を見ての事である。

近頃は日本にも武士道的な自殺はなくて、唯事業の失敗とか、個人的な煩悶悲觀、つまり歐米人の言ふ處の卑怯な死業が多くなつた

太田圓三氏の自殺は強度の神經衰弱からだ云はれるが、公表は心臓癱瘓で倒れたと言はれてゐる。何れにしてもあの實行力に富んだ新人技術家は二月二十二日死んで終つた。

寄合世帶の復興局で最も勤いた人は太田氏であつた、役人の技術家としてあれ丈に働く事は實に容易ならぬ努力であつたらう。

□

帝都の復興工事は大衆の知識に依つて立案計画されたもので、一人の土木部長が名を成すべきものではないが、あれだけ表面に立つて仕事を纏める爲には人知れぬ努力を以て幾多の難關を突破した事であらう。

天下の事を纏めるには總て私利私慾を超越しなければ出来るものではない、同時に感情のみに走るものもヅツ壊しきなるのみであるが、然し人間性としての熱と實行力は必ず信

仰的に強烈であらねばならぬ、

太田氏は先輩に屈しないと同時に後輩を非常に愛した、而感迫る公會の席上でも聲涙俱に下る人であつた、文藝や哲學に理解があつたから其談論は實に百花綵亂の有様であつた。

□

氏は隨分雑誌や出版物に對し種々な意味で補助したり援助したりしてゐた様であるが自分の著述として出版界に遺されたものは遂になかつた様に思ふ。若し遺されたる著述があるとすればそれは帝都復興の技術的計劃である。氏の理想は其所に最も大膽に現はれてゐる。

□

工事畫報が名譽賛助員として氏の署名を依頼した時、氏は一句の感懷を書にして贈つて來た、私は其句の意味を氏に問ふの間もなく今回の事に遭ふた。

氏が復興局の土木部長として帝都復興の地圖を脳にして撮つた、寫真と其一句の感懷とは恐らく氏の最後のものであつたらう。工事畫報は其所に得た二つの紀念物が太田氏の理想を永久に語るべき思出の種となつた。(四月二日城北田園の靜夜、ひとり淨机に凭つて認む)